

なんたる★

爆走伝説

12

2016

スコラブ

迂回

伊舎堂 仁

ナイス害

加賀田 優子

はだし

恋をしている



【目次】

連作

私的愛鳥週間・・・スコラブ

東京と挙げ句・・・ナイス害

駅で思う・・・迂回

いま宗教きたら・・・はだし

友達がブルーシートでくるまれた可能性とその春のからあげ・・・加賀田優子

読み物

（無題）・・・迂回

アリキタリキセキ・・・スコラブ

バイク・・・恋をしている

編集後記

ラン・チキン・ラン

タツプするほどに画面を走らされとわに飛べないままの鶏
狭かった部屋がときおり懐かしい戻りたいとは思わぬけれど
俺、卵、雌鳥、卵、卵、はて、ここにあるのは誰の卵か
鶏も故郷を思い鳴けれども詩に描かれるほどのこともなく
焼き鳥になうちまうぞと脅されて焼き鳥よりも働かされる

連雀

祝祭と知れども人をかいくぐるただの天気の良い平日
ありふれた誰かにすぎぬ雨男ひそかに名乗るレイン・ジャックと
起きたなら霜月ですねオレンジの間接光は眠りを誘う
魔女じゃないきみだとしても箒から落ちないことをほくは続ける
電線の不格好さを愛したくたえばすすめ連なる朝に

眼は真円に近付く

鳥籠が世界とすれば文鳥に神と見られる無自覚なまま

東京と挙げ句

ナイス害

待ち合わせ場所でゆっくりイヤホンを外す仕草がたまらない朝

モノレールは文字やその他を乗せまくり海綿体を優しく揺らす

暗いくらい浜松町でブーメラン投げて戻ってこない ∨ ≪ へ 〉

二月24日の新宿の雪全部に名前を付けた

駆け寄るとすぐにほどけるマフラーの結び方だけ覚えた女

モツ鍋で涙は溶けてそういえばあれからずっと息をしてない

このチーズケーキの断面北海道って感じ 心音が吹き抜けていく

おゝい冬。仕事なかよ。冬だから好きな人だけに会えればいい。

性欲はまた悲しみを追い越せず最後の雪の動線を追う

口唇に惑星ヘルペス爆誕し荒れた大地に口笛が乗る

駅で思う

迂回

あだ名にはならない位置に三つめの目ができてから行く同窓会

生きているところで見る字のばらばらを 虹つてあれは一色だった

酔った日はにんじんのみそ汁を飲む 破れた白いビールぶくろ

清潔なりモコンじょうずに舐めたから静かに家の鍵は閉まった

学校の様子は逐次 Youtube に up されており僕の様子は

この町も五穀豊穰を願いつつ道を練り歩くタイプの祭り

図書館に郷土の本はもうなくてはちみつをすこし借りて帰った

振動とボックス席でばらばらになる、イオンが窓を流れる

いま宗教きたら はだし

エアホッケーあるでしょ 打ち返してくれる人がいないとああなっちゃうよ

自分を輝子(てるこ)だと思い込んでいる象の、りんごを咀嚼する音

ミズカマキリ、飼うっていうか看取るでしたね

振袖の、袴の、ヤンキーたちは撮る、にこれからも勝てそうにない

あの空間にラルフはいない あたらしい情報、それがランク王国

いい時間 海をみりん で終わらせて そこから別になんにもなくて

届かない位置に湿布を貼るための知恵があふれてる、これやろう

木が風に揺れる 謙虚になんないみたいなことをブスに言われて

白菜とキットカットをもらったよ 冬はそういうのがありますね

バスって、護送されてる感じ

友達がブルーシートでくるまれた可能性とその春のからあげ

加賀田優子

ころしてやると思うことがくやしい川辺には嘴の欠けたのに生きる鳥

自分だけ手にいれている金曜日ひかるお酒は傷口にいい

押しわすれたのにエレベーターは着くにんげんはにんげんにまぎれる

かつわいいドラッグストアの店員をだれにもおしえないで生きている

映画がまだこわいコメディだつていつだれが死んじゃうのかわからない

五千円と一晚とひきかえの原付を川に沈める時間

生命から生命なんかができるからよだれを垂らして走つてしまう

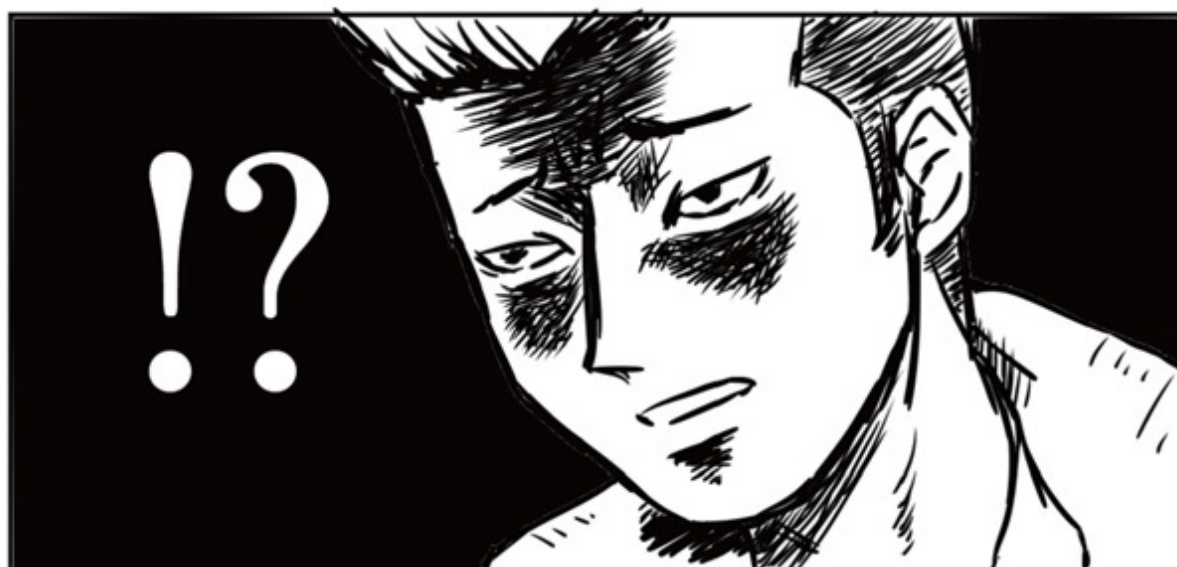
ちくしょーもーそもそも金属バットより出刃包丁のほうが近いじゃん

先輩に借りた漫画の先輩は後輩にむちゃくちゃ好かれてた

友達がブルーシートでくるまれた可能性とその春のからあげ

ひとりの夜でてくる鼻血はおもしろい朝日がのぼる寸前までは

(くじらつて交尾派手なんだろうね)(え、あれ分裂するんだよ)(え)(え)



無題

迂回

こんなお財布は嫌だ。呼吸をしている。

こんなお財布は嫌だ。小銭を勝手に発射する。

こんなお財布は嫌だ。Amazonの空間につながっている。

東京に落ちた財布をひろいあげ小銭の種類を数えなおした

ヤンキー漫画のキャラになりきって一言

オンガクのセンセーよお

野郎、ヤクザの家系図に消しゴム持ち出しやがったぜ

絵美————！！！！！！

正月を祝うのスゲーうめえ奴チームにいたら俺たちだって

先生、〇〇〇ので保健室に行っていていいですか。

先生、鼻血の風味が出たので保健室に行っていていいですか。

先生、夢なら鬼が優しいので保健室に行っていていいですか。

先生、四季に飽きたので保健室に行っていていいですか。

霊園にチョークがあってそれからは教室であり保健室だった

この銀行員、確実にベテランだ…。なんでそう思った？

ATMの画面から出てきた

諭吉の方が目で追ってる

軒下で雨宿りしていて、傘を貸してくれて、何も言わない

ネクタイのなびかなさだけ隠しては戦うように紅茶をすする

着地ありきの話だ。胸の内ではそう思いながら、さっき十数年ぶりに再会を果たした男と、地下鉄の隣席にいる。名前は……前野だったか、前川だったか、つまりそのぐらいの認識の相手なのだが、その、たぶん前野と思われる男は、がんが治るとか、アメリカでは実績がとか、そういう類の話に「奇跡」などとタイトルをつけて話しているので、ぼくはそれを聞くともなく聞いていた。

車窓から見える、黒とも灰色ともつかない、名前があるとも思えない景色を眺めながら、ぼくは、ありきたりな奇跡、というのはおかしい言い方かもしれないけれども、要するに、物語で見るような有り体の、そうなるということが前提の……そんな、奇跡の言葉を並べてみている。ポケットにコインとか、雪のアフリカとか、1分間のスピーチとか、ただの言葉が意味のない連なりになって、名前のない流れに混ざって、流れてゆく、また流れてゆく。

こんな日には、今を終えるためのキィのようなものが欲しい。ゲームならばセーブであるとか、呼び方はなんでもいいが、とにかく、今このときで一旦打ち切って、続きからできるような、そうした仕組み。そしてぼくはその続きをプレイせずに過ごすのだ。もちろん、そんなキィなどはないので、急に用を思い出したと言って、駅ふたつほど手前で席を立った。前野もそれを見て、ぼくも、と言いかけたので、連絡するから、とだけ一方的に言って、逃げるように降りた。連絡はするよ。いつとは言っていないけど。

駅のホームから階段をワンフロア上がると、すぐに自動販売機が見える。そう、たまに来る駅だから覚えていた。コーラを買おう。なんとなく電車を降りたときからそう決めていて、まあ、気分を切り替えたいというような、そういうことを無意識に思ったからだろう。流し込むように飲みながら、またたとえ話を考えている。一万円をいつもの自販機に貯めておけるとして、毎日同じ場所で同じコーラを買う。ときどき、自分以外の誰かも買って、残高が減っているのがわかる。それが、まだ知らない大切な友人であればいいなと思って、思いながら、どこかの道で知らないまますれ違う。奇跡なんて、たぶんそのぐらいのものでいいのだ。

バイクは結婚式が好きだった。

「走り去る猿ごきげん町、とうもろ一ねば一の一ずです」

という文言を書いた布を巻きつけたバイクに乗っているの、あだ名がバイクになっているバアア（もうその時点でキル）が初めて友人の結婚式に招待されるということで近所に住んでいる高校生の僕にそのことを相談してきた。

「あたしは、結婚式が好きで好きでしょうがないんだけど、もし当日にその好きさがあふれてとんでもない事をしてしまったら友人に申し訳がたたないと思ってるんよ」

「バイクでも人のことを考えるんだね。なかなか偉いじゃないか」

「うん。バイクでも友人は大事なのさ。で、相談なんだけれど」

この間も登校中の僕にバイクにまたがったババアがのろのろと並走しながらしゃべりかけているという光景が、他の人の目にはどう映るだろうということが僕の主な心配だった。

「あたしは、結婚式のことを好きじゃなくなりたい。ので、悪口を言ってくれ」

「結婚式の悪口？」

「そういうこったあな」

突然に結婚式の悪口を言ってくれと要求されても困る。なんといっても結婚の悪口でもなく、シンプルにその儀式に対しての悪口だから何とも悪口の間口が狭い（ヘイヨー）。

「うーん、まずお金がすごくかかるよね」

「お金がすごくかかる」

「それと、嘘をつかなきゃいけない」

「嘘？」

「うん、例えば新婦でも新郎でもそれなりにキマッてる格好をするから、たとえそれが似合ってなくてもその様子を褒めなきゃいけなかったりする」

「なるほど」

「あと料理がちよびっとしか出ないし」

「うんうん」

「それと全体への式って感じだから個人的におめでとうを言いにくいっていうのもあるかな。なんか自分が参加している感じが薄い」

「ほう、おめえさん、若いのによくわかってんねえ結婚式のこと」

「姉が3人いるからもう何回も出席してるんだよ」

バイクがヘルメットの奥で憧れのまなざしを僕に向けているのが見えてしまって、普通にゲボ吐きそうになった。

「あ、あと致命的なことがある」

気をそらしたくて、僕は割とくだらない冗談のつもりで言った。

「バイクに乗って出れないよ」

「なぬ？」

「バイクはバイクから降りないとそれには出席できない。基本的に結婚式は室内でやるし、たとえ外に出ることがあってもバイクにまたがったまま人を祝福するのはマナー違反になるよ」

のろのろと並走していたバイクが突然、止まった。バイクにとってはきつとこのバイクこそアイデンティティみたいなものだから、もしかして割合にショックだったのかなと思ったけれどまあ、どうでもいいので構わず歩き続けた。

「なあ」

バイクから数メートル離れて次の角を右に曲がろうかと思ったところで後ろから大声がとんできた。

「バリウムを飲んだこと、おあり？」

「は？」

思わず振り返ってにらんでしまった。昔から僕にからんでくるキチガイのババアだったので、めっちゃくちゃ嫌いだったし、いまでも更に嫌いになった。人を嫌いになることに限界なんてないんだ、とさわやかな気持ちにもなった。

「バリウムを飲んだこと、あんたはおあり？」

「ねえよ、バイクうぜーんだよ、もうどっか行けよ！」

「バリウムはまずいんだよ。おえーってなるよーこわいよー」

「だから、それが何の関係があるんだよ！てめえが自分から結婚式の話しといて突如バリウムの話してきてんじゃねえよ、金輪際話しかけてくんなくそババア！！」

「バイクじゃないんよ」

「あ？」

「あたしが乗ってるのこれ、バイクじゃないんよ」

そう言って、僕は少なくともそこで初めて見たが、バイクはバイクから降りた。そしてバイクのシートをポン、と叩くとみるみる内にそれは白っぽい液体になってコンクリートの歩道にぶちまけられた。

「あたしが乗ってたのはね、バリウムよ！！！！」

マジでくそ気持ち悪くてどんな落雷も当たってくれの精神マックスの斧雨ふれふれ世界にいたので、僕も顔真っ赤になって

「いや意味が分かんねえんだよ！！バイクが乗っていたのものがバイクではなく、バリウムだったとしても、結婚式をバリウムに乗りながら参加する奴はもっといねえから、もっといねえから！！！」

「うるサイ！！！！」

と言いながら人差し指を顔の前に当てて、考えたくはないがサイの物まねをしたバイクもといバリウムは本当にこの世のゴミ、宇宙のカス、電気のしきたりだった。

「うるサイ！！！！あんたらは、あたしのことをバイクバイクって言ってちっともあたしのことを分かってないじゃないか！！結婚式はまだ好きなままじゃないか！どうしてくれんだよ！！！！」

「うるせえのはてめえだろうが！！！！永遠に墓の形のベルを売るキヨスクにいろ！！！！っていうか、そもそもなんでそんな結婚式が好きなんだよ！！キモイよ！」

バリウムはヘルメットの奥でため息をついたようだった。それから、やれやれという風に頭をふって、面倒くさそうに言った。

「結婚式は、神アプリだからだろ」

僕はもう本当にかかわりたくなくて海に向かう電車はどの駅から出てるっけと思いながら、バリウムが見えなくなるまで駆け抜けた。

駅前の交番までたどり着いてゼーゼー肩で息をしながら何気なく指名手配犯の顔写真を眺めていると、その中に鹿の写真が混ざっていたので交番の人にあの一鹿の写真混ざってますけどと言ったら、ああごめんごめんなんて頭を搔いてバイクの写真と交換していた。

「バイクの写真じゃないですか」

「こいつはね、悪いよー」

交番も神アプリじゃーという大声がすぐ近くで聞こえた。

警官はニコニコしてるだけだし何だかよくわからないけれど怪談の「のっぺらぼう」と同じ世界観かよ、と思いながら僕は交番を後にしてそのまま駅のホームから湘南行きの電車に乗りこんだ。

バイクもといバリウムは本当に気が狂っている。昔からかかわりたくはないと思っていたけど、今日は特に重心ブレブレサンダーライガーで言っていることのほとんどが分からなかった。活舌も悪いので実際のところ「しゃわしゃわ」と聞こえる時間が長かったし、全部勘で受け答えしていたけれどそれでもキモかった。

このままどこか海の方まで逃げて、特に抱きたくない女と出会って別れてを繰り返していくのもおつぽよだな、と思って車窓を眺めていると隣から聞きなれた声が聞こえた。

「愛してるーってさーいきん、言わーなく、なーったーのーは一本当に」

バイクもといバリウムくそババアがゴスペラーズを歌っていた。電車にたまに乗っている大声出すヤバイじじいよりももっとやばい、「ひとり」を歌うババアがこんなところにいた。

「おい、ババア、おい！もういいよ、分かったから！！」

「というわけでーえーあんたは、奥さんを欲しなさい」

「ああ、ほっすよ！欲す！！」

「よし分かった」

くそババアはそのままニコニコしてその後は押し黙って電車に揺られていた。

「おい、ちょっと聞きたいんだが」

「なんだい？」

「この電車はどこに向かっているんだ？」

「結婚式だよ」

「は？誰の？」

「あたしたちのだよ」

ていーていていていていていていていーていていていていていー♪（星野源の

「恋」）

ガタンゴトンガタンゴトン……

次は一結婚式、結婚式。お急ぎのお客様はバリウム飲んで健康にバイク乗り回して峠攻めてください。では、本日も走り去る猿ごきげん町、とうもろーねばーのーずです。

【編集後記】

「スカートの下にジャージを履いている女の子と男の子の高校生カップルが好きなので、描いてみました」

知らない駅にいる幸福そうなカップルの知らない背中 of 絵だった。なので、どうしたらいいのか僕は分からなかった。

「どうしたらいい」

「どうもしなくていいよ」

「そうなんだ。とりあえず、上手だね」

と、言うとき殴られた。「どうもしなくていいって言った」と。褒めるのもどうもすることに入るのか。空中で話すのが好きだという理由で、彼女は僕 of 家のベランダに椅子を二つ並べてこのくそ寒いのに毎夜外で絵を見せながらその解説をしてくれるのだ

「ここは深谷駅」

聞いたこと of ない駅だった。田舎の駅だろう。

「深谷駅に一度だけ行ったことがあって、そこで見たの。このカップルを。あと、UFO」

「え、UFO の絵は描かないの？ そっちの方がヤバくない？」

んー、としばらく難しい顔をした後、突然笑顔になって

「今週 of ガッキー見た！？」

「ああ、うん、今週も見たよ」

「ガッキーを見たらもう一生分、どうでもいいくらい愛された気がしてこない？」

「ガッキー、スカートの下ジャージカップル、UFO の順なんだね」

「何が？」

「君 of 優先順位」

ガッキーが最高なので、ベランダで二人で月を見ていた。UFO が出てきたら大騒ぎしてやろう。ガッキーは最高。

「あ、でもさっき of 優先順位だけど」

ガッキー最高

「もっと上があったよ」

ガッキーガッキー

「いま、あなたと空中にいる」

2016 12/15 恋をしている

This is excited translation. Thank you very much.

なんたる星 12 月号

発行日：2016 年 12 月 16 日

編集発行人：恋をしている/迂回

表紙：スコラブ

Twitter：@nantaruhoshi

Mail：nantaruhoshi@excite.co.jp

執筆者

はだし([@sunsetsan0](#))

ナイス害 ([@NiceGuuuy](#))

恋をしている ([@yayoikenumai](#))

スコラブ([@scope_scape](#))

加賀田優子 ([@0ccak](#))

伊舎堂 仁 ([@hito_genom](#))

迂回 ([@ukaian](#))